中西美沙子 [教育コーディネーター]

心を聴きながら

中西美沙子プロフィール

教育コーディネーター。執筆・講演活動の傍ら、文章教室「スコーレ」・画廊「キューブ・ブルー」（浜松市中区元城町）を主宰。文章教室「スコーレ」では、小学生から大人まで幅広い層を対象に、ただ書き方を教えるのではなく、「この時代をどのように生きるか」を見つめさせるような試みをしています。

お問い合わせは、TEL.053-456-3770

ホームページは 中西美沙子 検索

著書の「ピアニシモでね」（東京書籍）は、中日新聞に連載した人気コラム「つかまえて!こころ」をまとめたもの。同著には、親子の問題もいろいろ描かれています。（税込1,500円）

＝お求めは浜松市内の谷島屋で＝

秋も深まった頃、赤い小さな果実が、私の文章教室にやって来ました。渋柿でした。奥浜名湖に住む大人の生徒のNさんが、わざわざ持参してくれたのです。それからは大騒ぎで干し柿作り。お教室の庭にある「ミズナラ」と「アオダモ」の大きな木に、柿の実を架けました。小さな温もりのある風景が、街の真ん中に生まれました。

Nさんは、長年看護師をなさっていました。総合病院の婦長さんです。何かが足りない思いがあったようです。彼女が私の教室にやってきたのは、そんな頃です。「自分の言葉で、今までしてきたことを書いてみたくて」。彼女は教室に来た理由を告げました。朴訥な人柄で、多くは語らない方です。

「看護師をしていて、患者さんのことをいやだなと感じたことが、一度だけありました」と、幾年か経った頃、Nさんは話し出しました。それは金城大学の学長、柏木哲夫さんの「ターミナルケアについて」の文章をテーマに、勉強をしていた時でした。「頑なな患者さんがいました。お歳を召した女性の方です」。彼女は過去の出来事を手繰るようにゆっくりと話します。「ある日、私がその患者さんに声をかけて、着替えを催促しました。すると彼女は私に、唾（つば）を吐きかけたのです」。「怒ることもできず、ひどく傷つきました」。彼女は確かめるように話しました。

「しばらくして、気づいたことがありました。私には、『患者さんにとって良いこと』を、自分が『心を込めて』しているのだという驕（おご）りがあったのではという思いです」。彼女の目が輝きます。「患者さんは、心の奥にある声を誰かに『聴いて欲しい』と思っているのです。それに私たちは気づいていなかったのです。何かをしてあげることより、それが大事だと感じました」。柏木さんの言葉と彼女の声が重なりました。「ターミナルケアの患者は、不安で一杯です。『がんばれ。つらくありませんか』などと、患者を気づかって声をかけることだけが良いとは言えません。患者の声に耳を傾け『聴く』ことが一番です」。

幼児の虐待や育児放棄が増えている現実。このようなことが起こる背景にも、「聴くこと」が親子の間でなされていないことがあるのでは。子どもの声を親が丁寧に聴けば、問題は減るでしょう。「聴くこと」は、言葉だけではありません。その子が、なにを求めているか、体で何を表現しているかを注意深く見ることも、「声を聴く」ことです。

庭の干し柿が、秋の日差しの中で輝いています。その輝きには、人の思いがこもっているようです。